

2021年2月21日

四旬節第1主日

菊地功大司教 メッセージ

イエスは聖霊によって、荒れ野へと送り出されました。普通に生活を営むことが難しい場であるからこそその荒れ野です。そこにはいのちを危機に陥れるありとあらゆる困難が待ち構えていると、容易に想像できるにもかかわらず、イエスは聖霊の導きに身をゆだねました。

イエスは40日にわたって荒れ野に留まり、サタンの誘惑を受けられました。逃げ出すことも出来たのかも知れませんが、しかし聖霊の導きに信頼するイエスは、御父への信頼のうちに希望を見いだしていました。

イエスは荒れ野での試練の間、人の命を脅かす危険に取り囲まれていながら、天使たちに仕えられていたと記されています。すなわち神の愛に基づく配慮に包み込まれることによって、命の危険から守られていました。

福音を宣べ伝えるための「時」が満ちるのを待ち続けたイエスは、信仰の内に真理を受け入れ、神の導きに身をゆだね、その導きの内に希望を見だし、それが故に神の愛に包まれていました。荒れ野での40日間の試練は、身体的な困難を乗り越えただけではなく、また心の誘惑に打ち勝ただけではなく、神に対する信仰、希望、愛を確認し、それを確信し、それによって力を得た体験です。信仰、希望、愛に確信を見いだしたとき、イエスは福音を宣べ伝えるためのふさわしい「時」を見いだしました。

この一年、わたしたちは命の危機に直面する中で、信仰の危機にも直面しています。今この時点でも、命を守るために取り組んでおられる医療関係者の皆さんに感謝し、また病床にある多くの方のためにお祈りいたします。わたしたちの信仰生活の頂点には、感謝の祭儀があります。

「聖体の集会においてキリストの体によって養われた者は、この最も神聖な神秘が適切

に示し、見事に実現する神の民の一致を具体的に表す」と、第二バチカン公会議の教会憲章に記されていますから、ミサにあずかることと、聖体を拝領することは、わたしたちの信仰生活にとって欠くべからざる重要なことであります。共に集う共同体のない信仰は、考えられません。

いま、集うことや共に聖体祭儀に与ることが難しい状態にあります。自分自身の感染を避け、また隣人の命を守るための選択ですが、共同体を解散したわけではありません。互いの信仰の絆が消え去ることはありません。困難な試練の時にあっても、聖霊の正しい導きを共に識別し、それに信頼し、その正しい導きに身をゆだねましょう。さまざまな甘言を弄する誘惑に惑わされないようにしましょう。聖霊の導きの内に、命の希望を見いだしましょう。互いの信仰の絆の内に、御父の愛を見いだしましょう。信仰、希望、愛に信頼を置き、勇気を持って福音を告げてまいりましょう。

四旬節の始まりに当たり、教会は第一主日に洗礼志願式を行うように勧めています。それは、キリスト者として生きることを望み、そのための学びと祈りの時を過ごしてきた方々が、洗礼への最後の準備をするために最もふさわしいのが、四旬節だからです。

四旬節にわたしたちは信仰の根本に立ち返り、何を信じているのか、どうして信じているのか、信じているのであればどのように生きるのかを見つめ直すよう招かれています。

したがって、洗礼を望まれる方々が信仰における決断を下そうと最終的な準備をするとき、教会共同体も洗礼志願者と一緒になって信仰を振り返る道を歩むことは、わたしたちの教会が徹頭徹尾「共同体」であることを考えたとき、ふさわしいことです。それぞれの教会共同体で洗礼の準備をされている洗礼志願者の方々のために、特に祈りをささげましょう。